

キャプテン

2007(平成19)年6月21日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★



監督・脚本＝室賀厚／原作＝ちばあきお『キャプテン』（集英社刊）／出演＝布施紀行／小川拓哉／中西健／岩田さゆり／小林麻央／寛利夫／宮崎美子／菅田俊／河野朝哉／永井浩介（トルネード・フィルム配給／2007年日本映画／98分）

…… 1972年連載スタートの、故ちばあきおの野球マンガが、今映画化！ 名門中学の野球部で球拾い専門だった主人公が、転校した中学校でヒョンな流れの中キャプテンに祭り上げられたが、その化けの皮はすぐに……？ さて、そこで彼はどんな決断を……？ 特訓で急に上達したり、ビリ中学が突然優勝争いに加わったり、「所詮マンガはマンガ」とバカにすることなかれ！ この映画を観れば、「君なら、できる！」というスローガンがあながち夢ではないことが実感できるはず。こんな映画を観たあなたは、その日から元気いっぱい……。

『バッテリー』 vs. 『キャプテン』

2007年2月2日に観た『バッテリー』は、1996年に刊行された、あさのあつこの『バッテリー』が原作だが、これは累計380万部を突破する大ベストセラーとのことだった。これに対して、1972年2月に『週刊少年ジャンプ』への連載が開始された故ちばあきおの『キャプテン』は、コミック累計1900万部、そして兄弟作『プレイボール』の1300万部をあわせると、実に合計3200万部というすごい数字。

両コミックが描くのは中学野球。大人でも子供でもない彼らは、恋愛にうつつを抜かず年頃ではないから、野球ドラマに特化しやすいもの……？ また何でも伸び盛りの年齢だから、人の何倍もの努力をすれば急激に実力がアップするという意味で、大逆転の感動ドラマを生み出しやすいもの……？

『バッテリー』は文字どおりピッチャーとキャッチャーの2人3脚の物語だったが、『キャプテン』は文字どおり、主人公谷口タカオ（布施紀行）が墨谷二中のキャプテ

ンに就任したことから生まれてくる笑いと涙の感動の物語！

そんな子供みたいな映画なんて……と言ってはダメ！ これからを生きる中学生だけではなく、くたびれた(?) 中年おやじのあなたや、引退と年金だけを楽しみにしている死にかけ(?) の団塊世代のあなたも、この映画が放つ「君なら、できる！」というメッセージをきちんと受けとめなくては……。

まず最初に面白いキャラをすべて紹介……

この映画の主人公はもちろん墨谷二中野球部のキャプテン谷口タカオだが、映画はなぜ彼がキャプテンになったのかを最初に面白く描いていく中で、彼を中心とした面白いキャラを一挙に紹介することにチャレンジ。

墨谷二中に転校してきた谷口が入部届けを提出するべく部室を訪れたが、そこはキャプテンが受験勉強のため野球部を辞めてしまったためキャプテン不在となっていた。とりあえず入部は大歓迎とのことで谷口はユニフォームに着替えたが、それがそれまで通っていた青葉学院のユニフォームだったことから大変な事態に……。つまり谷口が3年連続優勝校の青葉学院の野球部員であったこと、ポジションが3塁だったことがわかれば、誰がどう考えても彼がキャプテンに最適なことは明らか。実は彼は青葉学院の補欠のまた補欠で球拾い専門だったのだが、それを話すタイミングを失したまま、お調子者の2年生丸井(小川拓哉)の音頭によって全員一致で谷口がキャプテンに選任されてしまったわけだ。

そんな情報を新聞記事にまとめたのが佐々木舞(岩田さゆり)なら、3年生部員からの報告を聞いてホイホイとそれを了解したのが野球部顧問の三咲静香(小林麻央)。1年生のくせに野球にえらく自信をもっており、映画の後半大活躍するイガラシ(中西健)の登場はしばらく後だが、大工として腕のいい仕事をしている父親の茂夫(筧利夫)や、それを支えている明るい母親の孝江(宮崎美子)も含めて、登場人物たちのキャラは早い段階ですべて明らかに。これが、こんな単純な野球ドラマを何よりもわかりやすくするコツ……？

キャプテンの存在意義は……？

どんなスポーツでも、個人プレーではなくチームプレーを競う競技には、すべてキャプテンが存在する。中学や高校の野球チームでは、エースで4番というチームの柱

がいれば、彼がキャプテンに選ばれることが多いが、必ずしもそれがキャプテンに必要な不可欠な条件というわけではない。なぜなら、キャプテンは技術上のトップであることよりも、精神上のトップであることが要求されるから……。もっともそうであるためには、一定の技術が伴うことは大前提……。ところが、青葉学院のユニフォームを着てただけで、誤解が誤解を生んでキャプテンに祭り上げられてしまっただけの谷口だから、その化けの皮がはげるのは早かった……。練習試合では、エラー続出、三振の連続でチームはあっさりとコールド負け。これではキャプテンの信用ゼロとなったから、谷口がもう野球を辞めようと思ったのは当然……。

こんな両親なら……

『バッテリー』は1996年に刊行された原作だったから (?), 病弱の弟と野球嫌いの母親の存在という形で、主人公の家庭環境も複雑だった。したがって、主人公が野球一筋に生きていくについては祖父の応援が必要だったし、母親との和解が大きなテーマになった。しかし、1972年連載スタートの『キャプテン』では、そんなややこしい家庭問題は一切なく、ストーリーは単純そのもの。

考えてみれば『キャプテン』が連載を開始した当時、『巨人の星』『あしたのジョー』『タイガーマスク』『アタック No.1』など、昭和の高度経済成長とともに歩んできたスーパースターのマンガがたくさんあったが、それらのスタイルはすべて同じ。つまり、ただひたすら目標に向けて頑張るのみという姿に、日本国民はわが身を叱咤激励しながら、感動していたわけだ。ところが、1990年代にバブル崩壊と失われた10年を経験し、不透明な時代、フリーター増大の時代になってくれば、「君なら、できる！」という単純なこの映画のスローガンを信じて頑張ることができなくなったのは当然……？

ところが、原作を忠実に反映したこの映画では、谷口の父親茂夫もまさに高度経済成長時代の大工さん……。キャプテン失格の烙印を押され、野球部を辞めると言い始めた息子に対して、父親は元高校球児だったという弟子のサブ（永井浩介）を特訓係に任命。母親の孝江もそれを全面的に支援した。そのうえ、ノックボールを恐がる息子に対して、父親自ら身体の正面で受け止める (?) 手本を示したから、これには息子も大発奮。「よし、僕も頑張る！」となったから、あの時代はホントに単純でよかった……。



©2007 ちばあきお／
キャプテン製作委員会



🎬顧問の女教師も一緒に変身……？

野球部顧問の三咲先生は美人だが、野球のことは全然知らないよう。また彼女の言葉によると、「次の先生が来るまでの形だけの顧問」だそうで、まるでやる気なし。したがって、谷口がキャプテンになった時も「あっ、そう」で終わっていた。

ところが、谷口のキャプテン失格ぶりを目の当たりにした3年生部員が、谷口をキャプテンから下ろすよう直訴した時は、それを却下。意外にいいところがあるなと思っていると、その理由は「面倒なことに巻き込まれたくないだけなの」と言うから、再度失望。やはり、弱兵のもとには弱将が……？

ところがそんな顧問でも、その後の谷口の努力する姿を見ているうちに少しずつ態度が変化。そして、谷口の活躍によって2回戦突破、3回戦突破となると、積極的に表に出て活動するようになったから、現金なもの……？ ある意味で、日和見主義のいい加減な教師であることは否定できないが、ところどころで見せる眼力と気のきいた発言、そして何よりも美人であることに免じて、教師としても野球部顧問としても合格としておこう……。

🎬横綱と序二段の勝負でも……？

2回戦突破が大目標だった墨谷二中は、幸運やまぐれで勝ち進んでいった(?)のに対し、3年連続地区予選優勝で、目標を全国優勝においている青葉学院は、エース

の佐野（河野朝哉）を地区大会で出場させる予定なしという、まさに横綱相撲。ちょっとヤクザっぽいタイプ（？）の権藤監督（菅田俊）も自信满满、余裕しゃくしゃくのコメントを……。そりゃ横綱と序二段の勝負で、横綱が負けるはずがないのは当然……？

至近距離でノックを受ける特訓をこなして意気上がる墨谷二中だったが、1回表、いきなり満塁ホームランを浴びて4点ビハインド。青葉学院はハナから9回までやるつもりはなく、コールドゲームで終わらせる予定だから、2回も猛攻撃。しかし、ここは谷口のファインプレーなどがあり、はじめて青葉学院の得点なしというイニングが実現することに……。

その後のこの試合の展開は、1年生のイガラシの活躍もあって面白い。青葉学院はいつもコールドゲームばかりだったから、ピッチャーは6回も7回も投げた経験がなく、後半は少しバテてきたよう。そのため、墨谷二中は初ヒットも記録。さて、墨谷二中は9回裏までに何とか追いつき、追いこすことができるのだろうか……？そして、全国大会用に調整しているエースピッチャーを引きずり出すことができるのだろうか……？それはひとえに、墨谷二中のナインの集中力次第……。

古いものが新しい……、あなたも頑張ってみては……

1964年の東京オリンピックにおける、重量上げ、レスリング、体操そして女子バレーでの金メダルなどを目の当たりに見て、当時の日本人は「為せば成る！」と信じていたもの。したがって、1972年に連載を開始した原作を基にしたこの映画のキャッチフレーズも「君なら、できる！」だが、はっきり言ってこれは今の時代には全然マッチせず、古き良き昭和の時代を懐かしく思い出させるだけのフレーズ……？

しかし、教育崩壊と家庭崩壊が進み、少年非行が凶悪化している今の時代だからこそ、「古いものが新しい」と思えることも……？「努力すれば夢は現実に」という単純そのもののメッセージを観客に伝えてくれるこの映画が、まさにそれ！

「頑張ったらどうなるの……？」「どうせ無理なことは決まっているのに……」などと白けたことを言わず、この親父が20日間で家を完成させたように、またこの息子が墨谷二中という弱小チームを一躍青葉学院と優勝争いするチームに変身させたように、あなたも頑張ってみては……？

2007(平成19)年6月22日記